

日本図書館研究会第52回研究大会 グループ研究発表
2011.02.19

森博 図書館実践とその思想

静岡県気賀町立図書館時代の活動を中心
に

奥泉和久
(オーラルヒストリー研究グループ)

目次

- 1 はじめに
 - 2 森博研究の意義と目的, 方法
 - (1) 森, 分析の視点 (2) 本研究の進め方
 - 3 気賀町立図書館の活動
 - (1) 高校教師時代 (2) 気賀町立図書館, 発足の準備
 - (3) 町立図書館の開館 (4) 2つのワークショップ
 - 4 気賀町立図書館時代の意義
 - (1) 図書館実現への道のり (2) まちのなかの図書館
 - (3) 図書館から離れる
 - 5 おわりに
-

1 はじめに ■ 今年が没後40年、生きていれば米寿

- 1923年(大正12) 岡山市に生まれる
 - 1948年(昭和23)25歳 静岡県立気賀高校
 - 1949年(昭和24)26歳 静岡県・気賀町立図書館長
 - 1953年 再び教職に
 - 1956年(昭和31)33歳 大田区立池上図書館
 - 1959年(昭和34)36歳 大田区立洗足池図書館館長
 - 1964年～1970年 順天堂大学図書館など
 - 1970年(昭和45)47歳 都立日比谷図書館整理課長
 - 1971年(昭和46)48歳 死去
-

1 はじめに 森の業績 1

- 1959年～ 大田区立洗足池図書館館長
大規模(8万冊を収蔵)な自由開架閲覧の採用など
 - 東公図『東京都公共図書館の現状と問題点 1963』
都の図書館振興施策のスタートとして位置づけられる
 - 「中小レポート」(1963)作成(途中で委員を辞任)と普及
市町村立図書館の発展の契機
 - 『日本の参考図書』(1962)の執筆・編集
レファレンスサービスの環境整備
-

1 はじめに 森の業績 2

□ 日野市立図書館社会教育委員会・特別委員(1965年?)

図書館を市役所の中に入れるとか、公民館と同じ建物にする, などの案…… 「図書館サービスの基本原則を貫き通すことができたのも, 森の強い信念によるところが大きかったと思う」(前川恒雄氏)

→ 森の果たした役割、少なくないのでは

1 はじめに 本発表のポイント

- (1) 気賀町立図書館時代を検討
 - 図書館実践を明らかにし、森の図書館思想を検討
- (2) 1950年代の図書館活動についての再評価
 - 1950年代の実践に、1960年代において図書館が飛躍的に発展する一因があったのではないか

しかし、第2の視点は、第1の視点を分析することから導き出される(第2期に渡って引きつづきテーマとして設定)

→ 本発表では、第1の視点の分析に重点をおく

2 森博研究の意義と目的、方法

2.1 森、分析の視点

時期区分

- 第1期 1948～1953年 5年間 気賀町立図書館時代
- 第2期 1956～1964年 8年間 大田区立図書館時代
- 第3期 1965～1971年 7年間 大田区立図書館退職後

先行研究

- 大田区立図書館時代などに関して → 予稿集に記述
ところが.....
 - 気賀町立図書館時代 → ほとんどない
-

2 森博研究の意義と目的、方法

2.2 本研究の進め方

秋岡梧郎 「昭和31年……大田区立図書館創設の仕事……一切を自分に委せるという条件……最初に思い出したのは森君のこと」

戦前東京市立京橋図書館長、東京市立図書館の黄金期を築いたひとり 戦後は都立深川図書館長

では、なぜ森だったのか？

- 第1、静岡県伊東市の図書館のワークショップでの出会い
- 第2、森の図書館に対する取り組み方
- 第3、森の誠実な性格(追悼文)

→ 秋岡による評価を参考にしつつ、森の実践を検証

2 森博研究の意義と目的、方法

2.2 本研究の進め方

資料の欠落をインタビューで補う + a(資料提供)

- 福嶋(旧姓土井)礼子氏 1945年気賀町に再疎開。1948年県立気賀高校、編入学(このとき森が赴任)。1950年気賀町立図書館
 - 松田不秋氏 戦役で病気、療養のため温暖な気賀に。青年団のリーダー。1950年気賀図書館発足時の運営委員、1951年気賀町事務吏員、1956年気賀町立図書館
 - 鈴木健市氏 磐田市立図書館。県の図書館職員研修で森の講義を受け、森と出会う
 - 菅原勲氏 大田区立図書館時代の森の部下
-

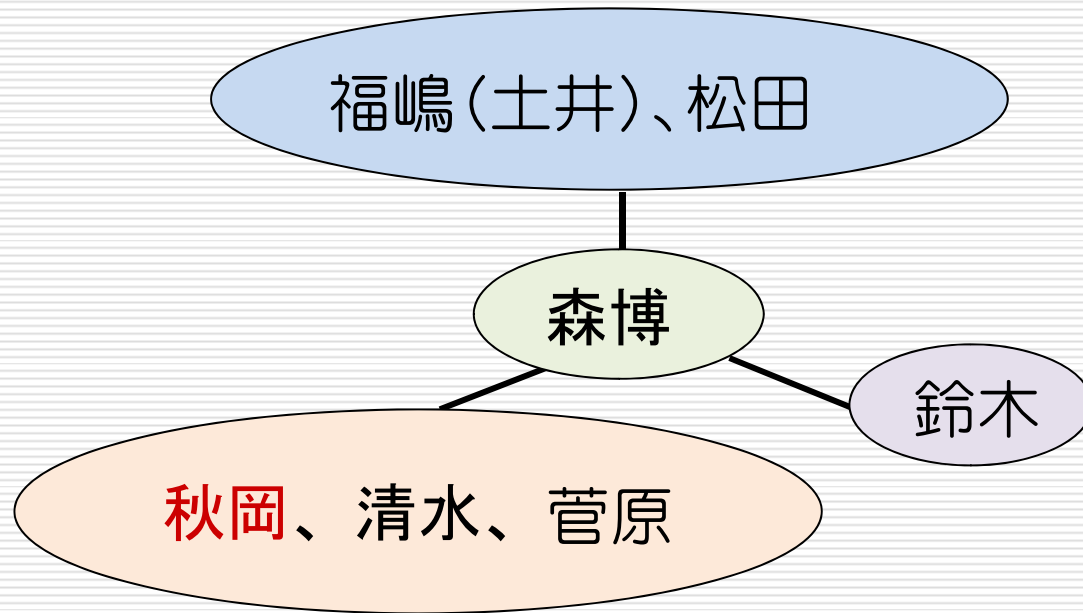
3 に進む前に ■ 気賀町の位置



3 に進む前に ■気賀町とは

- 江戸時代、東海道の姫街道（脇街道のこと）気賀の宿、関所が設けられ交通の要所
 - 1955年の町村合併により細江町、現在は、浜松市。
 - 1949年当時の気賀町の人口が約1万1、500人。産業は、農業が主体
 - 江戸時代から琉球藺（七島藺、藺草（いぐさ）のこと、畳表の原料で遠州表として流通）が当地の特産品
1950年代後半から細江町のみかん産業が盛ん。
-

3 に進む前に ■森をとりまく人びと



3 気賀町立図書館の活動

3.1 高校教師時代

なぜ森が気賀町立図書館へ移ったのか？

秋岡 森は「戦後パーズにひっかかってやむなく教職を去ることに……」

辞める経緯…… 内部告発的な文書、その出所が問題 / 1年を中心に官僚的な校長に反発、ストライキ騒動に発展

- → 直前になって、森や山村誠が、生徒を鎮め、事態收拾
 - 一連の騒動の責任をとるかたちで高校教師を辞任
 - 生徒の側に立ったことで、逆に反体制的な教師とみなされることに
-

3.2 気賀町立図書館、発足の準備

- 1948年 春 役場内議事堂の小室で、隔日夜だけ開館する図書館がスタート 図書費予算5万円、100冊から
 - 「一つには文化的な生活の向上をねがう世論の力であり、もう一つには町当局が誠意を持ってそれを受けようとしたところに、その一手段として図書館が浮かび上がった。」
都会からの青年の疎開者が多かった(松田)
 - 1949年3月 森、気賀高校を退職
4月 杉浦町長の後押しで気賀町立図書館長
-

3.3 町立図書館の開館 開かれた図書館をめざして

1950年5月5日 開館

- 場所 町の人が“四つ角”と称する町^町の中心、遠州鉄道・遠鉄バス会社の社屋2階21坪(約70m²、1階はバスの発着所・待合室)
 - 開館時間 午後1時～9時(月曜、祝日休館)
 - 利用 年齢・地域制限なし(他市町村可)
 - 貸出 当面1人1冊1週間(保証金、証明書は不要)、なお小学生1年生以上の貸出は、翌1951年から
-

3.3 町立図書館の開館 開かれた図書館をめざして

図書館運営の特徴的な点

- ①職員の勤務は交替制。午前中は開館せず、整理業務、製本などを行う。貸出とレファレンスサービスをできるだけ行うため。館員のうち1名は業務として、午後1時から2時半まで各自の研究時間が与えられた
 - ②開館当初から図書館協議会を設置
 - ③同様に図書館運営委員会を設置
 - ④町村内「青年団文庫」の図書 of 整理業務の実施・指導
-

3.4 2つのワークショップ その1 図書館法の普及

1951年2月5日～10日

関東地区図書館研究集会(図書館ワークショップ)

静岡県伊東市

- 森は、このワークショップに参加、集会の運営を担当
- 東京から深川図書館館長秋岡悟郎が参加

秋岡「若い人たちが夜おそくまで仕事をしていた。そこへ私が陣中見舞いに」行った。11時半頃になると「若者たちが私の室に押しかけて来て図書館問題について語り明かした」 → そのなかのひとりに森

3.4 2つのワークショップ その2 指導者の養成

同年7月23日～8月31日

文部省主催第2回図書館専門職員指導者講習
慶應義塾大学

- (1)講習の質の高さ
- (2)全国から、当時のトップクラスの図書館人が参加
「最大の収穫は、講習の指導に当たられた教授……多くの図書館人に接すること……森博」(清水正三)

森は、「ノート」にメモとともに講習の身分証明書を添付
→ 館界の指導的立場にある人たちと森も研鑽を積んだ

4 気賀町立図書館時代の意義

秋岡の評価のポイント

- 森が「町ぐるみの図書館作りにそれこそいのちをかけて没頭した」
 - 「最近若い図書館人の中で図書館の民主化をいう人々があるが、図書館長としてはかけ出しの森君が20年以上も前に身をもってそのことを実践した」
 - 1971年、『市民の図書館』出版の翌年にあたる
 - これを**検証**する
-

4.1 図書館実現への道のり ■利用の実態はどうか？

気賀図書館時代 利用の変遷 1951-1954

- 利用者の属性 **学生・児童約80%**、青年約10%、一般約8% 大きな変化はない。
- 貸出冊数 1951年度 16,000冊 → 1954年度 30,000冊 **3年で2倍**
- 貸出登録者数
1952年 2,633人 → 1954年 3,046人 **増加**

出典:『日本の図書館』1951-54 および 気賀町立図書館統計資料

4.1 図書館実現への道のり ■1954年度の比較

静岡県内貸出登録者数 1位は清水市立図書館

	人口	蔵書	貸出登録者数
気賀町立 図書館	1万1千人	6,000冊	3,046人
清水市立 図書館	11万人	12,000冊	3,093人

出典:『日本の図書館』1954

4.1 図書館実現への道のり ■ 森の評価は？

森「旅路より 公共図書館実現への小径」『静岡県教育委員会月報』（1951年8月）

- 自らのめざす図書館の前には「非常に大きな問題」があり「現在私も最も関心をもっている問題の一つ」（これ以上言及しない） → **いまだ公共図書館は実現せず？**

この一文の草稿と見られる手書きの資料

- 「この図書館のぶつかっている最大の困難と障害……この図書館経営はもののみごとに失敗……70%学生生徒によって占められています。その利用法が問題です。
-

4.1 図書館実現への道のり ■問題の所在

「非常に大きな問題」があり、図書館経営は失敗？

松田氏による

蓋を開けてみたら青年たちどころか、学生ばかり。これではだめだ、と。一般市民に公開するために図書館をつくるには、この姿から脱皮しないとだめだ。図書館を青年たちのたまり場にするとか、社会教育の一環した計画のなかで図書館を……世論に応えたことにはならない」

→ 秋岡の評価とは逆、森は、満足していない

4.2 まちのなかの図書館 ■森の意図したことは

■ 「非常に大きな問題」の解決のために

松田氏による

青年団は地区ごとに結成。それぞれに**文庫**。多くは数十冊程度。森は、そこに図書館から期間を定めて、**本を貸し出し**、それによって青年団活動の援助。**本の運搬**は青年たちが行う。**図書館との連絡**も青年たちが同様に行う。

→ **青年たちの図書館に対する意識を変えようとした**

4.2 まちのなかの図書館 ■ 図書館からの働きかけ

■ 「非常に大きな問題」への取り組み

- 森、青年団活動の一環、文集作りの熱を植え付けた(松田氏)
 - 森や福嶋(土井)氏が原稿を寄稿、新着図書を紹介するなど図書館からの働きかけ
 - 気賀町の一地区の伊目青年団『葦』4号(1953.3)
同青年団主催文化講座
森が講座を担当 → 「予稿集」
-

4.2 まちのなかの図書館 ■地域の中へ

松田氏による 目標を掲げ、実践

- 地域の図書館というのは、大衆のなかへ足を踏み込んでいく、そういう図書館でなければ成立しない。森は青年たちの集まる場所へ出向いて、夜ごと青年たちに地域の図書館の必要性を説得した。
 - 図書館に満足に本がない。そのなかで市民にサービスするためには知識と素養で補え、と。松田は、森の命を受け、気賀の青年たちのなかに入っていった。
-

4.2 まちのなかの図書館 ■「失敗」だと言うが

元磐田市立図書館鈴木健市氏による

- 1952(昭和27)年春、静岡県立葵文庫で県内図書館員の研修会を受講、講師であった森と出会う。
図書館について、参考する資料もなく、業務をどのようにしてよいかわからなかった → 森を訪ねた

「町の中心の、バスの切符発売所兼待合室の二階にあった気賀の図書館は本当に街中の人々の生活の中にあつた」(未公表追悼文) → その後1年間に4、5回気賀へ

4.3 図書館から離れる ■ 対立の構造

- 秋岡 「戦後パージにひっかかっ」た森を町長が図書館長として迎えた。「町長の改選に当たって保守系の町長に代わるや、森君は前町長に殉じて館長の職を辞し、再び高校の先生になった」

松田氏による

- 気賀町立図書館は、発足当初から、賛否両論。革新的な町長は、図書館づくりを主張、町の議会はそもそも食糧難の時代に図書館をつくることに反対だった。図書館をまちの真ん中につくることへの反発も強かった。
-

4.3 図書館から離れる ■町長選ではなく

- 杉浦町長は1952(昭和27)年10月25日 再選
- 10月5日 気賀町教育委員会の第1回選挙

松田氏による

- 教委選挙では保守勢力が優位に、反森に拍車。
森は、自分は図書館を離れられない、とも言っていた。

福嶋氏による

- 森が、自分がいることでこれ以上町のなかの対立を激化させることを避けたかった。今後は思うように図書館運営ができなくなると考えて図書館を去ったのではないか。
-

5 おわりに

- 第1 図書館をまちづくりの中心におき、その実現のために地域における図書館づくりを構想
 - 第2、図書館利用については貸出とレファレンスサービスを重視。これらのサービスを実施することを前提に、図書館の開館時間などを設定
 - 第3、気賀町立図書館の運営、周囲からの高い評価にもかかわらず、森自らの「問題」の解決には至っていないと考えていた
 - 森の図書館観
 - 公共図書館の役割とは、地域で、個人の確立をめざす人びとを支援する。
-

日本図書館研究会第52回研究大会 グループ研究発表
2011.02.19

森博 図書館実践とその思想

静岡県気賀町立図書館時代の活動を中心に

これで、発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

奥泉和久
(オーラルヒストリー研究グループ)